

特別展「ダフニスとクロエ ～文学、美術、音楽、舞台の世界から～」

会期 4月15日(土)～6月11日(日)

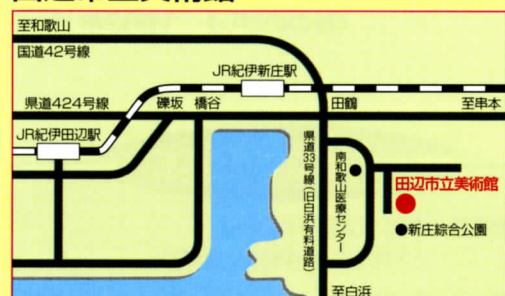
「ダフニスとクロエ」を愛読し、この物語の舞台となったギリシャ、レスボス島の出身でもあった出版者テリアドが最初にシャガールにこの物語の挿絵を依頼したのは1949年のことだったという。シャガールは当初ためらっていたようだが、1952年にこれを引き受ける。シャガールはこの年、再婚したヴァランティーナ・ブロドスキーとともにギリシャを旅行し、その後1954年にも再びギリシャを訪ねて取材を重ねている。ギリシャの地を踏むことで得たインスピレーションをもとに水彩やパステルによる素描をつみ、42点の原画を完成させて、ムルロ工房の職人とともに製版、刷りの作業を重ねてテリアドのエディション・ヴェルヴから刊行になったのは1961年のことである。この間にはパリ、オペラ座におけるバレエ「ダフニスとクロエ」の上演のための舞台美術の制作、衣装のデザインも手がけている。(学芸員 三谷 渉)



マルク・シャガールの版画集《ダフニスとクロエ》(1957-60年/徳島県立近代美術館蔵)から「扉絵」の図版を使用した当館特別展「ダフニスとクロエ～文学、美術、音楽、舞台の世界から～」のチラシ

利用案内

田辺市立美術館



JR紀伊田辺駅から明光バス「新庄病院前」下車、徒歩5分。

〒646-0015
和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770
FAX.0739-24-3771

田辺市立美術館分館
熊野古道なかへち美術館



JR紀伊田辺駅から龍神バス「なかへち美術館」下車。

〒646-1402
和歌山県田辺市中辺路町近露892
TEL.0739-65-0390
FAX.0739-65-0393

美術館あれこれ③ 作品調査について

展覧会を開催するためには、会場で展示される作品のことをよく知っておかなければなりません。誰が描いた、いつ頃描かれた、どんな絵具で描かれた、大きさはどのくらいなどの基本的な情報はもちろんのこと、この作者はどんな時に何を考えてこのような作品を描いたか、というような精神的な面に関わる部分なども、展覧会を組み立てていくうえで、場合によっては事前に調べておく必要があります。展覧会開催のためだけでなく、購入・寄贈・寄託など、作品を受け入れるためにもこの作業はとても大切なことなのです。

作家本人が存命の場合は本人に聞けばすむことですが、既に亡くなられている場合はその遺族や関係者、あるいは故人が記した文献などからそれらの情報を探っていくこととなります。ただ、これが100年や200年も前の人になると、遺族や関係者をたどることも難しくなりますし、作家によっては著作物を残していない人もいますので、そういう場合は作品そのものからできるだけの情報を読み取るしかありません。“穴が開くほど見つめる”と言いますが、作品調査にはそのくらいの集中力と観察力が求められるのです。(学芸員 辰巳 充)

ORANGE

表紙作品紹介 雑賀清子《楠の木の風》1999(平成11)年 熊野古道なかへち美術館蔵

「若い芽がのびると楠はひらひらとやさしく風に答える。葉がしっかりとしはじめると軽やかに風とともに踊り回る。身近に美しさを見つけスケッチをする。ペンも筆も風に同調する。制作はここからはじまる。木の国の名の通り大樹も多く、美しい形の木にしばしば出会う。一生筆を運ばせても四季のすばらしさを描ききることは不可能だと思いつながら、やはり描き続けていくに違いない。」
— 雑賀清子 スケッチ「楠の木の風」に寄せて
小さな一枚の絵の中に描かれているのは木と空だけ。雲は白く残され、青とうす紫の筆あとが風の流れを作っています。雑賀の特徴ある色彩と構図から、風や時間もたっぴり感じられるスケッチです。(学芸員 山本 泰代)

編集後記

これがお手元に届く頃には、もう季節が移っていると思いますが、今、当館の目の前の新庄総合公園では春の陽気に包まれ桜が満開となり、チューリップが一面に花開いています。年度も変わり、館員の異動もありました。新任職員と共に、日々頑張っています。5月になると、昨年の市町村合併で田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館が本館と分館になって、早くも1年が経過することになります。今後も二館で、より良い美術館を目指して頑張りますので、よろしくお願いたします。(本館 Y.M.)

田辺市立美術館NEWS
ORANGE Vol.4

発行年月日: 平成18年5月1日
編集・発行: 田辺市立美術館
熊野古道なかへち美術館



雑賀清子《楠の木の風》1999(平成11)年 熊野古道なかへち美術館蔵

「ダフニスとクロエ」の世界

田辺市立美術館 特別展 ダフニスとクロエ～文学、美術、音楽、舞台の世界から～

ロンゴスによるギリシャ語の牧歌的な恋愛小説「ダフニスとクロエ」は2世紀後半から3世紀前半ころに書かれたものと推定されています。しかし、作者のロンゴスについては詳しいことはわかっておらず、名前からギリシャ語に堪能だったローマ人の可能性も指摘されています。

紀元前後から流布した大衆的な散文のなかで、この「ダフニスとクロエ」が特に今日まで長く読みつがれ、様々な芸術家に影響を与えてきた理由はどこにあるのでしょうか。日本語の翻訳も文庫本で入手できますので、未読の方はこの機会にぜひ一読していただければと思うのですが、この物語の魅力の一つは、舞台となるレスボス島の自然の、絵画的ともいえるような描写にあるように感じられます。自身もこの物語に触発されて長編叙事詩「ヘルマンとドロテア」を書いたゲーテも「ダフニスとクロエ」の自然描写をことさら賛美していました。

この美しい描写による自然、四季の移り変わりを背景にして山羊飼いの少年ダフニスと羊飼いの少女クロエの純粋な、といってもけして観念的なものでない、恋の物語が所々に過去の文学、伝承、神話の反映もおりこまねながら展開し、幸せな結末をむかえます。そこにアルカディア（古代世界の理想郷）を重ねて見ることもけして大げさなことではないと思います。おそらくこのあたりが「ダフニスとクロエ」が今日まで長く愛読される大きな理由ではないでしょうか。今回の展覧会ではマルク・シャガール（1887-1985）が挿絵として制作したリトグラフ（石版画）全42点の展示を中心に「ダフニスとクロエ」が後々に与えた影響を紹介しています。「ダフニスとクロエ」が生み出したものもまた魅力的なものです。

※「クロエ」の表記は古典ギリシャ語の母音の長短を反映させると「クロエー」となりますが、本展覧会では慣用により「クロエ」としています。また「ダフニス」についても古典ギリシャ語の発音にしたがって「ダフニス」と表記される場合がありますが、これも慣用により「ダフニス」としています。（学芸員 三谷 渉）



1987年に岩波文庫の一冊として初版が刊行された松平千秋訳の「ダフニスとクロエー」（写真右）と昨年同訳にシャガールの挿絵全42点が添えられて刊行された「ダフニスとクロエー」（写真左／写真は普及版で豪華本の特装版も同時に刊行されている）

Information

会 期	4月15日(土)～6月11日(日)
開館時間	午前10時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
休 館 日	毎週月曜日
観 覧 料	一 般 600円(480円) 大・高生 300円(240円) 小・中生 150円(100円) ※()内は20名様以上の団体割引料金 ☆土曜日は小・中学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料
後 援	ギリシャ大使館
企画協力	Wonder Art Production
特別協力	徳島県立近代美術館

平成18年度展覧会案内

田辺市立美術館

H18.4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H19.1月	2月	3月			
①特別展 ダフニスとクロエ ～文学、美術、音楽、舞台の世界から～ 4/15(土)～6/11(日)			②館蔵品展 コレクションの歩み展 (前期)6/24(土)～7/23(日) (後期)8/5(土)～9/3(日) 展示替のため休館 7/24(月)～8/4(金)			③開館10周年記念特別展 近代日本絵画の諸相 展示替のため休館 I. 水彩画の近代展 II. 日本画の個性展 (前期)9/23(土)～10/15(日) (後期)10/28(土)～11/19(日)						IV. 写実と抽象 2/10(土)～3/25(日)		

熊野古道なかへち美術館

H18.4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	H19.1月	2月	3月
①館蔵品展 めぐる自然展 ～雑賀清子のスケッチより～ 4/29(土・祝)～6/18(日)			②館蔵品展 渡瀬凌雲展 7/15(土)～8/27(日)			③特別展 日本画の個性 (前期)9/23(土)～10/15(日) (後期)10/28(土)～11/19(日) 展示替のため休館 10/16(月)～10/27(金)			④館蔵品展(小企画) 近世・近代の南画 (前期)1/6(土)～2/4(日) (後期)2/24(土)～3/25(日) 展示替のため休館 2/5(月)～2/23(金)		

展覧会紹介

熊野古道なかへち美術館

★館蔵品展:めぐる自然展—雑賀清子の作品より 4月29日(土・祝)～6月18日(日)

油彩画家でありステンドグラス作家である雑賀清子は、作品発表を主にベルギーと和歌山県周辺で行って来ました。油彩では人物を対象に制作する画家ですが、旅行や散歩から発見した小さな自然は長年にわたる題材のひとつでもあり、スケッチブックの中に水彩と点描で丹念に記録されてきました。とりわけ一番身近なところにある自然に雑賀は新鮮な驚きを感じてきたようです。この20余年、雑賀が観察してきた田辺市周辺地域では、すでに見られなくなった野草、場所を変えて生き延びた花、たくましく環境の変化を受け入れながら育った草など、小さな自然もものを言わないままに厳しく変化してきたことがわかります。

足元に咲く草花や忘れ去られた虫の遺骸、また日常目にする木々や、一瞬も同じ形を保たない空の雲。朽ちていくもの、移ろうものに自分自身を重ねながら、小さな制作は一個人としての存在を問う作業でもありました。

本展では、館蔵品と近作の水彩および点描作品に雑賀自身のコメントと情報を添えて紹介します。雑賀独特の色彩や構図、強さとしなやかさ、またその的確な視点などをお楽しみ頂くことは勿論、身近な自然を再確認する機会にもして頂けることを願っています。



雑賀清子
《さいじょうろほととぎす》1980-90年代



雑賀清子
《秋ののげし》1983年

Information

開館時間	午前10時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
休 館 日	毎週月曜日
観 覧 料	一 般 210円(160円) 大・高生 150円(120円) 小・中生 100円(70円) ※()内は20名様以上の団体割引料金 ☆土曜日は小・中学生及び同伴する保護者や指導者の観覧料は無料

★館蔵品展:渡瀬凌雲展 7月15日(土)～8月27日(日)

凌雲、本名幸茂は明治37年7月、父祖の地であった中辺路・熊野を郷里として長野県下伊那郡根羽村で生まれました。幼い頃から画才を発揮していた凌雲は、7歳で長野県の杉山小谷に通信教育で南画の筆法を学びました。小谷、小谷ともに渡辺華山の息、小華の門人でした。11歳になると愛知県の山本梅荘の門に入り、半田町に下宿をして次男香雲の指導を受け、その後15歳で東京に出て福田浩湖画塾研究所に入っています。生涯を通して使用した雅号「凌雲」は12歳で与えられました。この元氣な《紅富貴図》は、凌雲16歳になる直前の春に描いたものです。

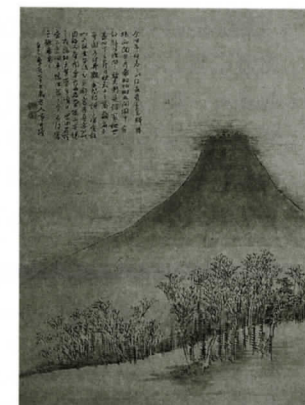


渡瀬凌雲
《紅富貴図》1920年

田辺市立美術館

★館蔵品展:コレクションの歩み展 前期:6月24日(土)～7月23日(日) 後期:8月5日(土)～9月3日(日)

今年は田辺市立美術館が開館してちょうど10年になります。この10年間に多くの方々のご好意、ご協力をいただきながら、地方の美術館としては他に類を見ないほどの質の高さを誇るコレクションを有することができました。本展覧会は開館10周年のプレイベントとして、これまでに当館が所蔵または寄託いただいた文人画、日本画、油彩画等の作品を受入年毎に分けて展示、紹介します。



野呂 介石
紅玉芙蓉峰図 1821年(文政4)
協村奨学会蔵(田辺市立美術館寄託)